

無我愛運動と安藤現慶の出版活動

近代仏教史の一視座

中 川 剛

はじめに

第二次世界大戦の終戦間もないころ、「神々のラッシュアワー」^①といわれた時代があった。戦時中の言論統制が解かれた勢いで禁句となっていた名もなき神々が世間に一度に噴出した現象である。そうした神々の多くは時を経ずして大半は歴史の波間に消えていった。ただし、仏教にしてもキリスト教にしても、その原初形態は大河の一滴から始まった点は、それらの神々と共通している。一つの宗教が大河となつて歴史に表われ、その時代の人々の心に注ぎ、歴史を動かしていく必然性が問われ、哲学と信仰に形成していく過程をできるだけ簡明に証明していかなければならない。

日本の新宗教の多くは創唱宗教と制度上の教派神道系に分類され、伝

無我愛運動と安藤現慶の出版活動

統的な宗教の分流に属さないものが多い。しかし、その反対に長い伝統の中から突然変異のかたちで新しい価値観が創りだされることがある。真宗の歴史の中からも明治以降、本山から問題視され、異安心として僧籍剥奪にまで及んだ事例の中にも、信仰に基づく新しい解釈を発見し、新たな道を模索する例はいくつもある。そうした研究は数多く発表されている。^②^③

一つの宗教が発展するには、その初期段階で個性豊かな弟子たちが集まったかどうかによって決まるのではないだろうか。釈迦を支えた弟子には、舍利弗や維摩詰のように性格の全く違う弟子が、その個性を生かして釈迦を支え、迦葉によって伝えられる。こうした現象は洋の東西を問わずいくつも見られる。

伊藤証信の霊的体験から始まった浄土真宗系の創唱宗教である無我我

愛運動には、証信の思想を後世に残そうと一生裏方から支え続けた人物がいた。三河安城出身の安藤現慶である。この人物については、よほど無我愛運動の歴史に詳しい人でなければ、知られていないだろう。しかし、証信と人脈のある森田草平・生田長江と文芸誌『反響』を出版し、また日月社という出版社を興し、漱石門下の森田草平、小宮豊隆らの著書を出版するなど、最も長く証信の運動を支援した僧侶である。

無我愛運動の研究は、吉田久一が『日本近代仏教社会史研究』で「無我愛運動と河上肇」として取り上げたものが最初である。⁴ 吉田は、無我愛運動とマルクス経済学者・河上肇との関係を注目した。従来、河上研究者の中で伊藤証信の存在は河上の『自叙伝』によって知られていたが、河上側の評価をもとに無我愛運動は批判されていた。吉田は証信を直接取材し、河上と無我愛運動の関係を双方の資料によって評価した。その後、証信の秘書であった千葉耕堂が『無我愛運動史概観』を著し、証信の生涯と無我愛運動史をまとめた。⁵

安藤現慶の個別的な研究は岡田洋一の「真宗僧侶・安藤現慶の思想と行動―大正期における自我状況の一断面として―」(『日本歴史』四八二号、一九八八年)が最初であり、大正期の出版事業を中心にまとめたものの、その後は長く研究や調査は進んでいなかった。

安藤現慶という一介の地方寺院住職が多感な青春期に一生を左右する目的をもち、その死後、檀家から後住(令孫)は「現慶さんのようになるな」とまでいわれ続けた、安藤現慶とはどのような人物であったのか、

という関心から筆を執ってみたい。

一 安藤現慶と無我愛運動

1 安藤現慶の生い立ちと伊藤証信

安藤現慶は一八八三(明治一六)年五月一日、愛知県碧海郡安城町(現安城市)赤松に所在する本楽寺という真宗大谷派の末寺に安藤見慶の次男として生まれた。父見慶は、一八七一(明治四)年に起こった大浜騒動(鷲塚騒動)に参加し、捕らわれて入獄した経験を持ち、一命は助かったものの、自坊の座敷牢に入れられた。そのような父見慶の姿を見て現慶は育った。見慶は牢から釈放されても村から出ることを禁じられ、現慶も罪人の子といわれて友さえできなかったという。幼少より文学に親しみ、住職以外の道に進むことを志したが、長兄は若くして夭折したためにその道は絶たれてしまった。成績は優秀ではなかったが、父の勧めで三河中学から真宗中学へと進んだ。当時の真宗中学は各地の選抜されたエリート寺院子弟が集まっており、授業についていくのもやっとなかったという。一九〇二(明治三四)年、真宗中学を卒業し、東京巣鴨の真宗大学に進んだが、父見慶は中学卒業の年に亡くなり、自坊の住職になることが決定したことによって、大学生活も将来の目標も持たず、無意味な生活を送っていたという。⁷ このような時に、真宗大学の先輩であった伊藤証信(一八七六―一九六三)が無我愛運動を始めたので

あった。

伊藤証信は三重県員弁郡の富農の家に生まれ、寺院の子息ではなかったが親が熱心な真宗門徒であった影響から一四歳で得度し、大垣の美濃教校に学び、京都の真宗中学を経て真宗大学に進んだ。真宗大学本科を卒えると成績優秀であった証信は真宗大学研究科へ進むこととなった。

清沢満之によって真宗大学が東京に移転することになり、これに伴って上京した。研究科在学中に、自身の信仰に疑問を感じ、父が危篤という電報を受け、三重に帰郷したときに、突然トランス状態に陥り、一九〇四（明治三七）年八月二十七日に「無我愛の啓示」を受けたのである。^⑧ 仏教の「無我」とトルストイの思想の「愛」をもとに「無我愛」を唱えた。無我愛とは、個人を我執から解放し、「自己」の運命は全く他の愛に任せ、同時に自分も全力をあげて他を愛する」という宗教的実践である。証信は同級生の山田文昭（一八七七～一九三三）と共同生活していた下宿先で、その実践として近所の学校にも行けない子供たちに読み書きを教えていた。山田は父がこの年の七月に急逝したため自坊に戻り大学を休学してしまったため、証信が一人で始めたものである。同年一月二十七日、親鸞聖人の祥月の前夜に開かれた講話の席で、自身の「無我愛」の持論を語ったが、大学の仲間から「君の話は丸で酒酔い」のようだと一笑されてしまった。ところが現慶はその話に興味を持ち、翌日も真宗大学の学友数人で訪れた。そして証信の信仰や、書評などを話す会を金曜会と名づけ、真宗大学の学生が証信の下宿に集まるようになった。^⑨

2 安藤現慶の入信

現慶は、一九〇五（明治三八）年二月七日、証信の下宿先に走り込んできて今までの煩悶を打ち明け無我愛運動に入信したという。入信に關しては、「思想の激変（信仰告白の二）」「『無我の愛』四号」と題する現慶の論文に詳しいが、興味深いのは

講話や文筆で、教えを受けたのは稲葉（円成）、清沢（満之）、近角（常観）の三先生で、直接に実際の行為で厳しい訓戒を与えられたのは多田（鼎）さんと（野田）四山兄と自身の母である。文筆上の内村鑑三氏と海老名（弾正）氏にも又大に導かれた。確信を得る間、及び其後に最も適切に、最も親しく導き励ましてくれたのが、伊藤（証信）山田（文昭）両兄であった。（中略）尚、別に、トルストイの言行と平民新聞一派の言行が僕の宗教的確信を得る上に強い力を与えて呉れた^⑩

と、当時、清沢満之が唱えた精神主義の影響が強かった中で、それにも満足できず、証信の無我愛運動に共鳴した点であろう。

少し遅れて参加したのは、同じく真宗大学の学生だった和田幽玄（一八八二～一九四二）である。和田もまた早くに兄と父を亡くし住職を任命されたが、進学の志は捨てきれず檀家を説得したところ、妻子を寺に残すことを条件にて進学をした青年であった。^⑪

一九〇五（明治三八）年三月二十九日、下宿先を引払い、巢鴨の森の中にある大日堂に移り住んで証信・和田・現慶の三人で共同生活を始めた。

無我苑の始まりである。

無我苑で証信と和田の文武の才に長けた二人の間で現慶は裏方に徹していた。無我苑で発行した『無我の愛』の執筆や夜学の講義を証信と和田しているなか、現慶の主な仕事は炊事や草むしりであった。無我愛運動は時を経ずして評判になり、無我苑に多くの訪問者が詰めかけるようになってきた。その中には平民社の堺利彦や石川三四郎、福田英子、大逆事件に連座し死刑となった内山愚童などがある。

大学では無我愛運動が一学生のことでは済まない状況になり、本山も学長だった南条文雄も看過できなくなっていた。そして、大学側から運動の即時中止を通達されてしまった。証信はこの通達をうけて、本山に対しては僧籍返上し、大学には退学届を提出し、この経緯を記した第一〇号『無我の愛』を「脱字号」と題して赤刷りで発行した。現慶も証信の決意に従うつもりであった。ところがこのような現慶の動きは、郷里の本楽寺にも伝わり、母親と檀家総代がすぐさま上京した。膝詰での説得をうけた末に、現慶は郷里へ連れ戻されてしまった。現慶は『無我の愛』第一号（十一月一〇付）で、

伊藤君が脱宗退学せられた波瀾に因み、小波動として僕は帰省することとなった。（中略）あくまでも保守的の檀徒及び僕の家庭は、僕の言行を頭から非として殆ど耳を傾けぬ。却って僕に回心懺悔する様、涙を流して説得するのである。¹²⁾

と経緯を語っている。父に続いて、今度は現慶が宗門を擯斥になること

を恐れたためである。郷里で現慶を待っていたのは家族や檀家だけではなかった。檀家が寺に繋ぎ止めるために「こしを」という女性と縁談を組んでいたのである。そのために帰郷後すぐに結婚させられてしまった。

3 安藤現慶の帰郷と無我苑の閉苑

一方、無我愛運動は、「脱字号」の反響が大きく、河上肇が入苑するなど発展していった。河上肇は当初、学習院のほか、四校の講師を務めており、その傍ら千山万水楼主人の名で読売新聞に「社会主義評論」を連載し、世間から注目されていた。その河上が実名を名乗り、一家を挙げて無我苑に移り住んだことから、新聞は無我愛運動のことを報じるようになった。

機関誌『無我の愛』は、もともと三人分の下宿代が浮いたことから、何か独自の出版物を出そうということとなり、当時の週刊『平民新聞』を参考にして同型の新聞を出した。最初は村の子供たちを集めて、夜学を開き、老人たちの悩みを聞く程度の運動であった。本山や大学からの中止勧告が激しくなると、それを跳ね除けようとする論潮は次第に社会批判を帯び、信仰を持たない人々や社会主義やキリスト教徒にも読者が拡張していった。現慶もまた忙しくなり、大学にはいかないようになる。このような状況で大学は郷里の母に大学へ反旗を翻した主旨のことを通告した。慌てた母は直ちに上京して現慶を連れ戻したのである。

一九〇六（明治三九）年二月に突然、機関誌『無我の愛』も運動も中

止することとなった。その理由は、同朋の中から無我苑を一大理想郷として建設しようという計画が持ち上がり、教団化へ進み始めていたからである。教団を否定した証信が、今度は自らが教祖と祀り上げられて新たな教団となる矛盾にぶつかっていたのである。「今迄の伝道法が軽跳浮薄であったと云うこと且つ、もっと自分の身の行状を修めねばならぬ」として証信は同朋の説得を顧みず閉苑してしまった。直接の動機は布教に出かけた群馬県伊勢崎で田中正造に会ったことが証信を反省させた⁽¹⁴⁾。その後、河上肇の紹介によって農園に就職したが、まもなく山口県徳山で女学校を経営する赤松照幢に教師として招かれ、東京をあとにした。

現慶の論文は『無我の愛』数本掲載され、「憂うる姉妹へ」(第一号)

は、無我愛を推奨するもので「凡ての苦痛は皆、我利我執の執念から湧き出てくるのである。さらば如何にして煩悶を除去すべきか、苦痛を除去する鑰は、「無我の愛」の自覚にある。我利我執を根底から取り去るのである。自力無効と知るのである。」とし、「無我愛」の真意を自覚し煩悶苦痛を除去し給え。」と無我愛の布教に力を注いでいることが伺えるが、主張そのものは、伊藤証信と重なる部分が多く、独自性には乏しい。他には、新刊本の書評や三河に連れ戻されてからの真宗大学同窓との交流を伝えたものであった。その内容は「三河だより」として真宗大学卒業生や三河中学の同窓生と会合したりして、西三河地方で無我愛運動の支部を作ろうと行動していた矢先に、無我苑が閉じられてしまったために、住職としての読書の日々を過ごしたという。

二 『鞆』の発刊

1 『鞆』の発刊

周知のように、三河地方は真宗の碩学を多く輩出した地である。佐々木月樵や山田文昭などを輩出し、清沢満之が晩年をおくった西方寺も近くにあり、精神主義に影響された青年僧侶も多かった。また、真宗大学の同窓組織の三為会や農村青年団の活動も活発で、地方知識人も多かったことが、連れ戻された現慶を受け入れてくれる下地となっていた。最初に現慶をかばったのは京極徳含・徳順兄弟であった。弟・徳順は早稲田大学出身で窪田空穂やアラギ派の土屋文明を三河に招いた人物であった。

帰郷した当初は、檀家や家族の見る目も厳しく、住職としての日々を過ごしていたが、次第に寺院の研究会や信仰に関する座談会に力を注ぐようになり、活動範囲は広がっていった⁽¹⁵⁾。また同じ頃、岡崎の俳壇とも交流を持つようになり、その双方が連携し雑誌を出すこととなった⁽¹⁶⁾。

一九一(明治四四)年四月、現慶は月刊誌『鞆』を創刊した⁽¹⁷⁾。

「ふらここ」とはブランコの意味である。体裁は、新聞型で八頁。宗教学は薄く、主に文芸や俳句欄などで構成されたものである。このような体裁になったのには次のような理由があった。

発刊の二ヶ月前、岡崎の俳人岡田撫琴の宅に現慶、岡本黙骨ほか数名が集まり、「このままでは物足らぬ、じつとしてはいられない。何事か

せねばならぬ」と寺院僧侶の研究会和岡崎を中心に活動する俳人たちと機関雑誌をつくることを決定した。岡田は、地方新聞を経営する茶人・画人・俳人など地方知識人の反面、俠客としても知られていた。第一号の「編集餘事」に「本誌発刊の始め某宗教雑誌を受け継ぐような話も有之候処、矢張独立と決定し候¹⁸⁾。」とあり、「某宗教雑誌」とは『無我の愛』(第二次¹⁹⁾)と思われるが、独自の雑誌を目指すことになった。この雑誌の発刊に大きく協力してくれたのは、岡崎で新聞業を経営する岡田撫琴であった。岡田は岡崎の名家の生まれで、後に岡崎の醤油製造業岡田壮太郎の養子なり、早くから岡崎市連尺町の俳人植田石芝のもとで俳句を学び、高浜虚子・河東碧梧桐・伊藤左千夫ら正岡子規一門の俳人や野口雨情・若山牧水・中山晋平など作家とも交流を持った文化人である²⁰⁾。急遽、この雑誌の発刊が決まったため、第三種郵便認可の関係で『岡崎朝報』の号外として第一号を発刊する。おそらく岡田撫琴の助言によったものであろう。この雑誌の編集を現慶が務め、発行所は三河中学以来の友人京極徳含の信照寺に置き、俳句の編集を岡崎の俳人加藤夢吊が担当することとなった。

執筆者は、僧侶中心の僧団部と俳諧中心の俳団部に別れ、僧団には京極徳含(春牛)・京極徳順(春洋)、岩津紀明(一笑・千奨)、上野馨(黙山)、山田惟孝(友山)、山内智誠(孤泊)、寿台順悟(菱涯)、三浦教観(司城)、天野智曜(桃鶯)などの安城市内の一六カ寺各宗連合会と碧海の一六カ寺の真宗寺院の末寺「第七組北部」組織が中心となった

ものである。興味深いのは、安城市内の連合会は宗派を問わず、禅宗・浄土宗・真言宗・真宗高田派・真宗大谷派などが「徒に宗是のみを計り居る時にあらず須らく佛陀の大法に基づいて²¹⁾」布教や社会を改善していく研究会を毎月一回開き、春秋の大会と夏期講習会を開催している会であった。このように開かれた集会であったため、名古屋から宗教雑誌『まこと』を編集していた亀山孝淳や、愛知県一宮で宗教学院を主宰していた笈潮²²⁾(潮風)など尾張地方の真宗僧侶も同人として参加するようになっていった。

『鞆』は一地方から出版した雑誌ながら、その寄稿者は幅広いものである。名前を挙げると、伊藤証信、堺利彦(社会主義者)、原霞外(作家)、小田頼造(トルストイアン)、河上肇、高浜虚子、鳥谷部陽太郎、森田草平、高島米峰など社会主義者から新仏教関係やトルストイアン、有名な俳人まで載っている。多くは伊藤証信の人脈と重なっているが、現慶が独自に人脈を広げていった結果でもあった。

2 『野の声』への改題

『鞆』は、一九二二(明治四五)年一月二五日付の第一〇号から『野の声』と改題することになる。一介の地方寺院の住職の経営では資金も集まらず、また購読数も伸びなかったことによるものである。題名の『鞆』も見慣れない文字で不評だったため、『野の声』へと改題したのである²³⁾。一説には、平民社伝道行商で有名な小田頼造の雅号「野声」

からとったものといわれる。⁽²³⁾

『野の声』も長く続かなかったようである。一九一二（明治四五）年『野の声』九月号（通号では第一七号）が筆禍に関わり、現慶は編集を辞めなくてはならない事態に陥った。⁽²⁴⁾ その理由は、現慶が「最近における行動は、僧侶として不謹慎なりとて、当局者より訓戒され、ある筋より大に注意」されたことによるものである。この頃、現慶は一週間ほど上京し、我生活社を経営していた証信や新仏教の米峰や赤旗事件の刑期をおえた堺利彦に面会したことが警察の目にとまり、三河に帰ってきてからも警官が集会を監視するようになった。堺の『売文集』にも寄稿したことが、警察の目にとまったものであろう。⁽²⁵⁾

この時期は、大逆事件直後であり、言論弾圧が厳しい時期である。伊藤証信の『無我の愛』で「大逆事件の啓示⁽²⁶⁾」という論文を発表し、大逆事件に関する記事を一切許さない時勢の中、幸徳秋水を批判する内容ながら、世間に事件を公表するという反骨精神を世間に示した。この論文は発禁処分になり、証信は罰金刑を断り、「信者から貰ったお金を払うわけにはいかない」として、実刑をうけた。『野の声』も大逆事件の連座を免れた原霞外の「余が墮落史⁽²⁷⁾」や、岡本黙骨の「文芸時観⁽²⁸⁾」で大逆事件に触れ、文芸界を批判する記事が発表された。

文芸時観

岡本黙骨

▲昨年の劈頭には一国の大事として実て天下の耳目をも聳動せしめ

無我愛運動と安藤現慶の出版活動

たる幸徳一派の死刑執行があった。そうして其筋に於る危険思想取締と称する運動が激烈に行はれて、平静なる文藝界に一大波動を及ぼした。（中略）出版物の取締が嚴重になったと共に、六号活字の古文学物も片っ端から發かれ、長生きすれば憂き目を見るもの哉と愚痴も言いたげに検挙せられた。実にあらぬ時代にあらぬ生辱を晒した作物も少なくなかった、そうして現在文芸家の如きも一樣に口を嵌せられて了つて、出版界には妙な警八風が吹き荒んだ、この事件の名残としては僅かに幸徳秋水著『基督抹殺論』を記念としたのみで、此事に関して現われたる文藝の作物はなかった。（以下略）

と文芸界を批判した記事が掲載され、警察からマークされつつあった。また、現慶が書いた私小説「布教師」や「意中の女」など墮落した僧侶をモデルにした文芸や、「金と女と信仰」「三重生活の快味」などに自立できない苦悩を証信に訴えたりしている。『野の声』に「三重生活の快味」には「寺院生活より、もっとよい生活、もっとよい職業、もっと張合いのいい仕事、他にも沢山あるけれども、僕にはそれらに手出しする技量がない⁽²⁹⁾」と僧侶としての自覚が全くなく、東京や岡崎で遊興に耽るようになり、住職としての仕事も疎かになっていることを吐露している。この言動は、巢鴨無我苑時代の同朋からも批判がよせられ、中外日報記者だった井上淡星⁽³⁰⁾が現慶に次のような音信を送っている。

▲不相^{あいかたず}変毒^{あいかたず}つかう。枯山兄、兄の理想は活動弁士であろう。兄の理想は都の紅い燈だろう。兄の理想は新しい人の草履取だろう。兄の

理想は強い酒であろう。金縁眼鏡だろう。列車の食堂室だろう。電車の中の視慾だろう。岡崎の新人だろう。……浅薄、虚偽、模倣、

浮調子。あ、かくて兄は何時か眠りにつくだろう。枯山兄、兄には、

函嶺を夜半にこゑた詩人親鸞の心臓の鼓動をうかがうような気はつくまい。要するに馬鹿！。兄を評するにもっとも適当な語だと思ふ。⁽³¹⁾

と現慶を痛烈に批判した内容である。この音信に対して現慶は、

小生儀、実に黒染めの衣纏う身に恥じず、浅間しき事にのみ沈溺致し居り、時々空恐ろしくも存ぜられ候。

而し、一言、弁護がましい事を申せば、今の所、小生は「真に道義の必要を知ればこそ深き信念がほしければこそ、苦しみもがき、あがくなれ」なんと、心得候が、諸兄如何御思召候哉。重ねて批評を待つ。

と自分の非を認めている。このような生活態度も当局に咎められ、ついに編集からはなれることとなってしまった。

現慶が抜けた『野の声』は岡田撫琴が編集を継ぐが、その穴を埋めるには至らなかった。発刊当時から廃刊の不安を抱えたまま継続していた『鞆』『野の声』は証信の援助もあったが、通号一九号で廃刊になってしまったようである。

僅か、一年七カ月の期間であったが、河東碧梧桐⁽³⁴⁾、森田草平⁽³⁵⁾など文人や、現慶が主催した宗教講話には村上專精、南条文雄、住田智見などを招き、西三河地方に最新の文化を揚げたことは画期的なことであった。

三 『反響』と日月社

1 出版事業への進出

『野の声』の編集からはずれた現慶は、警察の目もあり地元での行動を慎まなければならなかったが、小雑誌の編集には地元多くの寺院僧侶が参加していたため、檀家などからの批判は少なかったようである。

ほとぼりを冷ますという理由で、上京も許された。いつの頃から判然としないが、一九一二（明治四五）年頃に森田草平と親しくなり、岡崎での講演会や自坊の赤松本楽寺の離れで小説の執筆をさせるようになった。⁽³⁶⁾

森田の郷里は岐阜で、帰郷や名古屋での用事の度に、東海道線の途中にある岡崎に立ち寄ったのである。森田を結びつけたのは、伊藤証信である。一九一二（明治四五）年『無我の愛』第二回読書会に森田が参加したのがきっかけである。その席上で森田は「私は伊藤さんからは、半年余りも雑誌を頂いているので何とか言わねば済まぬと思っていた。実は雑誌は真面目と云うのか面白くて、一字一句を残さず読んでいた」と語ったという。⁽³⁷⁾

三河での運動の拠点を失った現慶は、森田に「金子をだして雑誌を遣りたい」と東京で雑誌を出版したいと申し出たため、森田は生田長江に相談し、発刊したのが『反響』であった。⁽³⁸⁾

雑誌『反響』は一九一四（大正三）年四月一六日に発刊された。発行人は森田草平、編集人は生田長江、発行所は反響社、発売所は植竹書院

である。題字は夏目漱石、表紙画は津田青楓が描いた。この人名から夏目漱石の影響下にあることは一目瞭然である。この出版に先立って、森田と生田はその披露会を一九一四（大正三）年三月一四日に神田橋外の三河屋で開いているが、その出席者に現慶の名前はないが、おそらく東京と安城を行き来していたためであろう。出席者を列記すると、

津田青楓、徳田秋江（近松秋江）、中村古峽、植竹喜四郎、小宮豊隆、岩野泡鳴、安倍能成、鈴木三重吉、岡田耕三、堺利彦、万造寺齊、伊藤証信、沼波瓊音、和辻哲郎、阿部次郎

この会には「お約束下すった方々は、漱石先生を除いて、一人残らず御集まり下すった」としている。森田と生田は一高時代からの同窓として親交があり、⁽⁴⁰⁾漱石門下の関係者が多いが、社会主義者の堺利彦や伊藤証信の存在は、文芸批評誌として異彩を放っていた。この雑誌の意図を生田長江は『反響』第一巻第一号の「消息」欄で「私共が雑誌を出したのは、人まねしよう為ではない。なるべく他の雑誌と違ったところのあるものを拵えるつもりだ（中略）私共は私共と近い人々にいよいよ近づいて行く。思想を、趣味を、もしくは肌合いを同じうする限りに於て、何等かの党派らしいものが出来上り、またそれに活気ある限り、だんだんと色彩を濃厚にして行くのは自然の勢である。」と述べている。また言論の自由を出来るだけ拡大する為には、政治論などもやれるやうにしなければならぬ。それも近い内に実行する。」と記し、保証金一千円を積み、「政治上の時事問題に亘って」も社会批評をするという意欲的な雑誌であった。

『反響』の編集はおもに生田、森田の二人でおこない、現慶は住職の仕事があるため、月の半分は自坊に帰って、東京と安城を行き来しながら編集をしていた。⁽⁴¹⁾『反響』が創刊されて数か月後、販売所を経営していた植竹書院の植竹喜四郎が、現慶に出版社を共同で興すことを提案し、⁽⁴²⁾現慶は日月社を経営することとなった。『反響』第五号に「田舎から」と題した現慶の寄稿にその経緯が記してある。

▲「反響」に因みて僕は発売所の主人、植竹喜四郎と大分親しくなり、九月から太陽社というのを創立して二人で出版事業をやることになった。僕としては、副業の道楽仕事であるが、今のところかなり真剣になっている。さし当り第一種として「反響叢書」の出版を引受け、第二種の仕事として「現代百科文庫」というのを刊行することとなった。「反響叢書」は主として生田、森田両氏が撰定せられ、「百科文庫」は、僕と植竹君とで相談してやる筈、別紙広告の如き「宗教叢書」は僕の先輩師友の協賛を得て、僕が主として経営するのであるが出版の経営は始めてであるから、定めしヘマな事をしでかすであろうと思う。⁽⁴²⁾

太陽社は、日月社となったが、「反響叢書」は『現代百科文庫』として「文藝思潮叢書」一二編、「世界名著梗概叢書」一四編「宗教叢書」四六編の出版が植竹喜四郎と共に企画された。⁽⁴³⁾他に、単行本として森田草平の『縮刷・自叙伝』なども出版されているので、さらに出版数が多かつ

たかもしれないがすべて発見されていないので、企画だけで終わったものもある。この広告は、『反響』以外では、アナキストの大杉栄が主宰していた『近代思想』に載ったものが確認できるが、アナキズム運動へのカンパという側面からであろう。

「文藝思想叢書」の執筆者は森田草平、生田長江、小宮豊隆、高浜虚子、与謝野鉄幹、真山青果らである。現慶はこの頃、森田との関係から夏目漱石の許に出入りし、漱石の著書を出版しなかったが、代わりにまだ無名の存在だった漱石の弟子たちの出版を後押しすることとなった。戦後、出版された森田草平の『漱石先生と私』下巻（東西出版社、一九四八年）に現慶と夏目漱石とのエピソードが描かれている。

安藤君は「是非夏目先生に紹介してくれ」と強請るものだから、或木曜会の当日、私は同君をお宅へ連れて行った。その後も彼は在京中欠かさず木曜会へ出席して私の欠席した日にも伺ったらしい。

（中略）安藤君は例に依って、「先生はこれまで禅の方は大分お読みになったようだが、親鸞上人の著書乃至その研究はお読みになったことが御座いますか」と訊ねた。先生は勿論「ない」と答えられた。すると、安藤君は「それでは是非読んで頂きたい。もし読んで頂ければ、書物は私が持って参りますから」と頻りにお勧めした。先生もその熱心に絆されて、「君がそれ程に云ふなら読んでもいいが、一体親鸞上人といふ人は何いふ人だ」と聞き返された。すると安藤君は得たとばかり、「今日は見えて居らぬようじゃが、

親鸞上人は森田さんそっくりの人です」と答えたものである。それを聞いて、先生は「ふうむ」と云ったまま、

「さうか、森田に似ているのか。そんなら僕には好く分かっているから、親鸞上人はもう読まんでもいい。」と答えた。

これにはさすがの安藤君もぎゃふんと参ってしばし言葉がでなかった。

ここで断って置かなければならぬのは、安藤君としては、そう云えば定めて先生の氣に入るだろうと思って、私に似ているといふようなことを言い出したのである。（中略）安藤君はそれからすっかり萎けてしまつて、片隅の方へ引込んだまゝ、その晩は終いまで小さくなっていた。十一頃になって来合わせた連中が引きあげようとした時、安藤君もその後に跟いて座を立とうとすると、先生はそれを呼び留めて、

「安藤君、親鸞上人は僕も読んで見るからね。序があったら、本を持って来て貸してくれたまへ」と言はれた。

後日、夏目漱石は仏教書を現慶に送り返し、「私にはどうも浄土教がよくわからない」といったという。⁴⁶ 漱石の鎌倉円覚寺参禅は明治二十七年であるが、禅にも浄土真宗にも信仰にまで発展してはいない。宗教に対して、あくまでも知的好奇心として、この言葉をかけたのであろう。漱石自身に現慶の印象は多く訪ねてくる青年の一人に過ぎなかったが、現慶にとっては雲の上の存在であった。

日月社の「宗教叢書」は現慶独自の企画であった。顧問に森田草平、生田長江、伊藤証信、和田對白（幽玄）を置いた⁴⁷。和田幽玄は、真宗大卒卒業後は『無我の愛』（第一次）の編集技術を中外日報の社長真溪涙骨に見込まれ、東京で中外日報記者として活躍しており、その人脈を頼ったのであろう。「宗教叢書」には、仏教・キリスト教から、救世軍や天理教のものまで出版したのは注目される。当時、天理教は宗教として公認されるか否か、各界での議論が激しかった頃である。執筆者は、西川光次郎、岡本黙骨、江部鴨村、廣池千九郎、村上專精など幅広い。廣池はのち天理教から独立してモラロジーを創設した人物である。山岡莊八の評伝『燃える軌道』に詳しい。

2 植竹書院からの独立

一九一四（大正三）年一〇月ごろ、日月社は、植竹喜四郎と現慶の共同経営から『反響』と反響叢書事業を植竹書院から独立することになり東京本郷元町で出版社を開くこととなる。本格的に出版業を始めた現慶は妻子を東京に住ませ、「宗教叢書」の執筆依頼をするために奔走した。村上專精を訪ねた場面を『反響』第八号「編集ののち」に記しているので引用しよう。

▲四五日前に村上博士を訪問した。「出版の景気はどうかい、損をするなよ」と、博士は先づ親切に注意されて、更に言葉を改め「由來、僧侶の仕事と経済とはうまく両立しない様だ、両本願寺の経済

も思わしく行かぬらしい。（中略）先年、早稲田大学で、加藤弘之氏の演説を聞いたが、早稲田があんなに盛大になったのは、大隈伯の経営方針が、よかった為だといふ話を聞いて、始めは変だと思った。教育の精神こそ大切なれ、経済を主として説くは如何しいと當時不審に思っていたが、今日にして疑問は釈然とした、如何なる仕事でも先づ経済方針を確定せねばならない」云々と順々と説かれたので、不景気な時節柄、僕は唯、頭をカイていた。

▲村上氏から、「宗教叢書」中へ編入する「傳教と弘法」及び「道元と親鸞」の二編を頂く承諾を得て帰った。

「傳教と弘法」後の広告に載っていないので、企画だけで終わったようである。この「道元と親鸞」は『道元禪師と親鸞聖人』として日月社から出版されている。村上專精が危惧したように、日月社は長くは続かなかった。

『反響』は第一巻九号（大正四年二月）まで発行したところで巻号の序次を改め、二巻三号から二巻五号まで出版された。その三カ月隔てて復刊一巻一号が出版されたが、そのまま終刊になった。⁴⁸最後の復刊号は、発売所を日月社から東京堂なったので、現慶は『反響』の経営から離れ、生田が一人で経営するようになった。『反響』は一九一四（大正三）年四月一六日発行の第一号第一巻から一九一五（大正四）年九月九日発行の復刊第一号まで計一三冊が出版された。

日月社がいつ倒産したのかは定かではないが、一九一六（大正五）年

頃のことだという。現慶が出版業に本格的に手を付けたのは、高島米峰に影響されたところが大きい。『反響』第七号「日月社から」に、このような一文がある。

▲僕は新仏教徒中の中心人物たる高島米峰氏を風変りの一実業家として尊敬している。僕は鶏聲堂流の常識主義と米峰式の新人道を標準として、更に幾分の道楽と商売気を加味して、とにかくやつてみるつもりでいる。始めての経験だからでもあろうが可なり面白そうに想像される、唯恨むべくは、肝腎の資本が少ないから、堂々たる仕事ができない。⁽⁴⁸⁾

高島米峰と現慶とは、岡崎で『鞆』を発行している頃からの付き合いである。⁽⁴⁹⁾高島の仏教界での革新的な行動と、大逆事件直後に幸徳秋水の『基督抹殺論』を自社の丙子出版から出した反骨精神に惹かれるものがあった。また現慶と同じく寺院出身（浄土真宗西本願寺派）であったことも一層親近感をいだかせたのである。

しかし、高島米峰のように出版社の経営が軌道に乗ることはなく、莫大な借金を背負い家族と共に郷里に帰ることとなった。寺の所有していた土地だけでは足りず、檀家にも借金の穴埋めを頼み、田畑を手放した門徒もいたという。

日月社が倒産した原因は、取次店との利益配分だったという。出版事情の分からない現慶は、取次店と日月社で利益を折半という形で、経費、雑費を自己負担したため、採算が合うはずなかった。無我苑二代目苑

主の安藤慶爾氏によれば、「採算は度外視だった⁽⁵¹⁾」と、出版業の経営に関して素人だったことが最大の原因であるが、寺院住職と出版社の社長業を両立させようとしたところに無理があった。大正期の文学界で安藤現慶の名前が忘れ去られたのは、漱石門下の森田草平や小宮豊隆など、まだ出版の機会に恵まれなかった新人に発表の場を与え裏方に回ったからである。現慶は、自身の筆力では文壇に名を残すことができないことを自認しつつ出版社を興し、無償で貢献したことは評価しなければならぬだろう。

四 現慶の帰郷

1 西端無我苑建設の援助

出版事業の負債を抱え、失意のうちに帰った現慶は、しばらく雌伏していた。この間、一九一九（大正八）年頃に木津無庵、石川了整らが制定の補正を本山に訴えた宗門改革期成同盟会に参加し、京都や名古屋を奔走したが、自坊を離れることはなかったようである。現慶が再び動き出すのは、一九二三（大正一二）年、関東大震災によって東京で被災し、行き場を失った証信を三河に招聘する計画が持ち上がった時であった。

証信を東京から呼び寄せる事に助力したのは、京極徳順、山田友山、岡田撫琴らかつての「鞆」の会員や、農業青年団の竜灯団であった。竜灯団の幹部、杉浦民一はアララギ派の農民歌人で東京の証信の許を出入

りしたことがきっかけであった。

一九二五（大正一四）年四月、証信は、東京の中野から家族と共に愛知県碧海郡明治村西端（現・碧南市）に移り、千葉耕堂『無我愛運動史概観』によれば、「西端には、竜灯団員の共同になっている階下二間、階上一間の手頃な家屋があいていたので、先生御夫妻はそこに住むこととなり、その住居を「竜灯窟」と名づけた」という。この「竜灯窟」でしばらく読書生活を送っていたが、生活基盤が不安定であった事を心配した現慶、山田友山が奔走し、真宗専門学校（現・同朋大学）の講師の職を幹旋した。一九二九（昭和四）年から一九三七（昭和一二）年まで、週二科目の非常勤で哲学の講座を受け持つこととなる。経済的な安定を得た証信は一九三三（昭和八）年、西端に無我苑本部の建設を突然宣言する。

或る時、青年がカゴに腐りかかった馬鈴薯をもってきて「豚にやるのは勿体ないで、悪いところを切りとって食べて下さい」と好意で置いていった。この言葉聞いた妻・あさ子は愕然とし、「私たちが、こうして陋屋に住み、粗食に甘んじているので、いつの間にか、村の青年たちが馴れっこになり、心からバカにする気もなくても、豚にやる食料を持て来て、置いていくような礼を失した行為を平気でするようにするのである。これは一つ考え直して自分の手で堂々たる無我苑を建設すべきである」と思い、証信を説得した結果、昭和八年に西端で無我苑道場を建設することになったのである。⁽³⁸⁾

現慶は無我苑道場の建設に賛成し、建設後援会の幹事となり証信夫妻を支えた。建設予定額の九千円の資金は全国から集まり、無我苑道場は「竜灯窟」に程近い場所に、田畑を含め八〇〇坪の敷地を購入した。そこに、木造二階建ての住居兼道場が完成し、昭和九年一月「竜灯窟」から移った。西端無我苑は集会を開いても、百人くらい収容でき、十人前後は宿泊できる建物であった。

現慶は巢鴨時代のように無我苑に住みこむことはなかったが、大谷瑩韶を招いた俳句会の発起人や、無我苑が開く会の世話人として支えた。毎月開かれる哲学会や俳句会に時折顔を出す程度で積極的な参加はなかった。代わりに、軍隊から帰って行き場のない現慶の三男・慶爾を無我苑の世話させ、自分は自坊の寺の仕事と本山の布教師として過ごしていた。三男・慶爾は後に証信の養子となり、二代目無我苑・苑主となった。

2 戦後の無我愛運動と現慶の死

戦後、証信の戦争責任が追及され始め、その口火を切ったのは森田草平であった。証信の戦中の発言は2・1ゼネストによって革新勢力から責任問題の追究が激しくなり、その弁解をするのに終始した。何よりも、証信の名前を「邪教の教祖」として印象づけたのは河上肇の『自叙伝』⁽³⁹⁾が革新的風潮によって爆発的に売れたことであろう。証信と河上はその思想性を超えて小菅刑務所まで面会に行くなど、⁽⁴⁰⁾河上の妻・秀との交流も五十年近く続いていた。証信の戦争中の言動は戦争協力という点で、

非難されても仕方がない一面はあったが、河上の言うような「邪教の教祖」と評価される活動ではなかった。証信の名譽の為に付言すれば、ちょうど同じ頃、韓国白十字教会の長老・韓現相^{かんげんそう}を通して秋田刑務所に収監されていた朴烈の救援にも協力的であった。常に弱者や言われなき罪に落とされた人々に、無我愛運動は同情的であった。たとえ森田草平や河上肇に非難されても、その批判を甘受し、自分の主張を変えることはなかった。しかし、戦後復刊された『無我愛』の読者は、激減し、生活は養女・まちが女学校の教師から得られる僅かな給料が生活を支えた。現慶は、そうした、証信夫婦の生活を援助しようとしたが、自らの借金を檀家から借りていたために、思うように賄えなかった。そして最大の彼の功績は自分の三男・慶爾を無我苑に婿養子として後継者にしたことであろう。さらに付言すれば、戦前、河上肇、大山郁夫、小岩井淨の交流から中国同文学院から引き揚げてきた学者達に協力して愛知大学を創立させたことであろう。慶爾はその功績により、同大学の図書館長となり、無我苑の生活を支えることができた。証信が森田から誘われた共產党入党をきっぱり断り、賀川豊彦や谷口雅春らの呼びかけに呼応して「世界連邦運動」に積極的に支持し、無我苑支部をつくった⁽⁶⁾。だが現慶はこの運動には参加しなかった。森田がいうような戦争責任を自ら甘受していた。森田との交遊は、森田の死まで続き、夏目漱石時代から文学への影響は具現する為に、親鸞をモデルとした「救われぬ親鸞」を執筆した。この原稿は出版されないまま、現慶の死後、無我苑で保管されていた。

すでに戦前、和田幽玄は若くして亡くなり、現慶が一人で運動を支えたが、一九五四（昭和二九）年一月二四日、証信に先立って急死した。脳溢血によるものである。伊藤慶爾によれば、現慶の晩年は、「一日のうち三分の一は悲感、悔恨、三分の一は懺悔、三分の一は感謝」し、無我愛の認識を深めるべく証信の本を自坊で読み耽ったという⁽⁷⁾。婿養子となった慶爾には、「真宗教学思想史」を執筆したいと語り、その内容は「真宗教学と無我愛思想体系との交渉」であったという⁽⁸⁾。安城に帰って以来、事業から遠ざかった現慶は、無我愛運動を陰で支えながら本山の布教伝道に力を注ぎ、自己の信仰を追究していったなかで書かれたものである。その二年後、証信の妻あさ子も亡くなり、証信に最も近い弟子や関係者はすべて亡くなっていた。その為、運動の初期から知り、活動を共にした弟子の大半が亡くなったために、無我愛運動を正当に評価する人々がいなくなったことが、証信の悲劇であっただろう。

戦後、吉田茂内閣の下で文部大臣をつとめた安藤正純は証信に対し無我愛運動を宗教法人法に基づく宗教教団として昇格させることを奨めたが、証信は、教団こそ宗教を墮落させる原因としてこれを誇示し、無我苑の建物は残ったが、宗教活動は一代で終わった。

無我愛運動は証信の霊的体験から始まった浄土真宗系の創唱宗教であったが、社会に背を向けることなく、戦争という最大の不殺生戒の禁戒を彼なりの平和主義で対処しようとした。その点は多少の誤謬はあっても正当に評価しなければならない。一九八五（昭和六〇）年に機関誌『無

『我が愛』は全巻復刻されたが、まだ正当な評価は得ていない。⁵⁹⁾

むすびに

真宗の革新運動は清沢満之に始まり、さまざまな進歩的な運動となり拡張していったが、ルターの宗教革命のように発展しなかった。その第一の原因は、僅かに芽生えた改革の萌芽を異安心とし、僧籍剥奪するなどして教団内で弾圧したためであろう。第二の原因として考えられるのは、若い僧侶が高等教育（大学）を受験するに当たり、多くの学生が既に妻帯者になっていたことが、僧侶たちの雄飛を阻んだことが冒険でできなかった原因である。和田幽玄には既に妻子があり、自坊で人質に取られる形になっていた。現慶も寺に戻ったところで結婚させられていた。血縁相続を優先させる浄土真宗の伝統の歴史から、多くの有能な僧侶達は地方寺院の住職として活躍する場もなく消えた。

安藤現慶という人物は、前述したように決して天才型の人物ではない。しかし、証信の無我愛運動に共鳴し、裏方に徹して運動を支えた。無我愛運動は歴史の波に消えていったが、近代という時代、宗教者は檀家や信者に対処するだけではなく、核家族という家族制度の在り方や資本主義・平和主義にも目を向けなければならなかった。どのように大衆化し、変遷していくのか、その時代を生きるにはその課題を背負うことになる。無我愛運動は、証信三〇歳から多少の中断はあっても五〇年以上続いた。

その中であって現慶は証信の運動を支えることによって、自らの信仰を明らかにしようとした。出版事業も巨額の負債を抱え失敗に終わってしまったが、現慶なりの社会運動であったといえよう。その努力は伊藤証信以上に評価しなければならない。

註

- (1) H・N マックファーランド著、内藤豊、杉本武之訳『神々のラッシュアワー』(社会思想社、一九六九年) 参照。
- (2) 水谷寿『異安心史の研究』(大雄閣、一九三四年) 参照。
- (3) 近年では、平成二〇年〜平成二一年度科学研究費補助金(基盤研究(C)) 研究成果中間報告書「近代化の中の伝統宗教と精神運動―基準点としての近角常観研究」(研究代表者、岩田文昭、二〇〇九年)の研究などがある。
- (4) 吉田久一『日本近代仏教社会史研究』(吉川弘文館、一九六四年)
- (5) 千葉耕堂『無我愛運動史概観』(無我愛運動史料編纂会、一九七〇年)その後、柏木隆法による機関紙『無我の愛』(不二出版、一九八五年)の全号復刻と著書『伊藤証信とその周辺』(不二出版、一九八六年)や三宅守常『無我愛哲学の基礎的研究』(京文社、一九八九年)によって無我愛運動の社会的な影響と幅広い人脈が解明されている。
- (6) 同朋大学仏教文化研究所 研究叢書VI『史料 大浜騒動』(法蔵館、二〇〇三年) 二八八頁。
- (7) 安藤現慶「思想の激変(信仰告白の二)」(『無我の愛』第六号、一九〇五年八月二五日) 四頁。
- (8) 伊藤証信「余が思想信念の経歴」(『無我愛』一九五四年三月二五日) 五頁。
- (9) 伊藤証信「無我愛運動 最初の同志 安藤現慶君の現世修了を慶祝す(上)―余が思想信念の経歴(一九)―」(『無我愛』第一九八号、一九五四年三月二五日) 一頁。

- (10) 安藤現慶「感謝(信仰告白の一)」(『無我の愛』第四号、一九〇五年七月二五日) 四頁。
- (11) 柏木隆法「和田幽玄」(『中外日報』二〇〇七年一月一日) 五頁。
- (12) 安藤現慶「三河だより」(『無我の愛』第一号、一九〇五年一月一〇日) 六頁。
- (13) 伊藤証信「余が信仰の経過(四)」(『無我の愛』第一八号、一九〇六年二月二九日) 六頁。
- (14) 島田宗三「田中正造翁余録・上」(三一書房、一九七二年) 参照。
- (15) 「教学会の記」(『鞆』第一号、一九一一年四月一五日) 七頁。
- (16) 岡田撫琴「発行の辞」(『鞆』第一号、一九一一年四月一五日) 一頁。
- (17) 「鞆」『野の声』は、柏木隆法によって復刻され、復刻版『無我の愛』(不二出版、一九八五年) 第一四巻に所収されている。
- (18) 岡本黙骨「編集餘事」(『鞆』第一号、一九一一年四月一五日) 七頁。
- (19) 山口県徳山の女学校から戻った伊藤証信は、我生活社をおこし、機関誌『我生活』を発行していた。七号から『無我の愛』と名称を変えた。
- (20) 岡田撫琴に関しては「反骨の文人岡田撫琴」(『新編・岡崎市史 近代4』新編岡崎市史編纂室、一九九一年) 四九九頁〜五〇一頁に詳しい。
- (21) 「教学会の記」(『鞆』第一号、一九一一年四月一五日) 七頁。
- (22) 「改題の辞」(『野の声』第一〇号、明治一九一二年一月二五日) 一頁。
- (23) 伊藤慶爾氏談。小田頼造の雅号は「野声」「芙蓉」があり、「野声」は「簡易聖書」の野のバラから号したという。
- (24) 安藤現慶「摺筆の辞」(『野の声』第一八号、一九一二年一〇月五日) 一頁。
- (25) 安藤現慶「懐かしい伯父さん」(『売文集』丙午出版、一九一二年) 五二頁〜五八頁。
- (26) 伊藤証信「大逆事件の啓示」(『無我の愛』第二八号、一九一一年三月五日) 二〜三頁。
- (27) 原霞外「余が墮落史」(『野の声』第一〇号、一九一二年一月二五日) 三頁。
- (28) 岡本黙骨「文藝時事」(『野の声』第一〇号、一九一二年一月二五日) 三頁。
- (29) 安藤現慶「三重生活の快味」(『野の声』第一六号、八月号、一九一二年八月二五日) 三頁。
- (30) 安藤現慶「東京だより」(『鞆』第八号、一九一一年一月一五日) 三頁。
- (31) 「師友の音信」(『野の声』第一五号、一九一二年七月一五日) 一頁。
- (32) 岡田撫琴「同人に代わりて」(『野の声』第一九号、一九一二年一月三〇日) 一頁。
- (33) 伊藤証信「御断り」(『野の声』第一四号、一九一二年六月一三日) 七頁。
- (34) 安藤現慶「碧梧桐氏来岡」(『鞆』第三号、一九一一年六月二九日) 三頁。
- (35) 松井管甲「岡崎だより」(『野の声』第一九号、一九一二年一月三〇日) 七頁。
- (36) 森田草平「岡崎」(『野の声』第一九号、一九一二年一月三〇日) 三頁。
- (37) 京極徳順「真剣か冗談か―堺、森田両氏の談」(『野の声』第一一号、一九一二年二月二〇日) 二頁。
- (38) 森田草平「編集のち」(『反響』第二巻第一号、反響社、一九一五年一月) 一七〇頁。
- (39) 生田長江「消息」(『反響』第一巻第一号、反響社、一九一四年四月一四頁)。
- (40) 根岸正純「森田草平の文学」(風楓社、一九七六年) 一三四頁〜一三七頁。
- (41) 安藤現慶「日月社から」(『反響』第九号、反響社、一九一五年二月一二六頁)。
- (42) 安藤現慶「田舎から」(『反響』第一巻第五号、反響社、一九一四年九月) 九四頁。

- (43) 『反響』第一卷第六号（一九一四年一〇月）の広告欄参照。
- (44) 『近代思想』復活号（一九一五年一〇月）の広告欄参照。
- (45) 『夏目漱石全集』第一五卷、（岩波書店、一九六七年）五四六頁。
- (46) 安藤現慶の直筆原稿「すくわれぬ親鸞」 柏木隆法所蔵。
- (47) 『反響』（第一卷第六号、一九一四年一〇月）の広告欄参照。
- (48) 浦西和彦『『反響』解題』雑誌『反響』復刻版（不二出版、一九八五）八頁。
- (49) 安藤現慶「日月社から」（『反響』第七号、反響社、一九一四年一月）一〇八頁。
- (50) 安藤現慶「編集餘事——都の小天地」（『野の声』第一四号、一九一二年六月二三日）二頁。
- (51) 伊藤慶爾談。
- (52) 安藤現慶「宗門改造か自己改造か」（『精神運動』第二号、一九二〇年二月一日）一頁。
- (53) 千葉耕堂『無我愛運動史概観』（『無我愛運動史料編纂室、一九七〇年』一四三頁。
- (54) 河上肇『自叙伝』（世界評論、一九四八三年）一〇七〜一三七頁。
- (55) 伊藤証信「小菅刑務所に河上博士を訪ふ（上）——共産党と宗教との関係の生きた実例」『無我の愛』第一六五号、一九五一年六月一日）一〜二頁。
- (56) 千葉耕堂『無我愛運動史概観』（『無我愛運動史料編纂会、一九七〇年』一七三〜一七六頁。
- (57) 伊藤証信「無我愛運動 最初の同志 安藤現慶君の現世修了を慶祝す（下）」——余が思想信念の経歴（二〇）——『無我愛』第一九九号、一九五四年四月二五日）六頁。
- (58) 伊藤慶爾「父の死」（『無我愛』第一九八号、一九五四年四月二五日）四頁。
- (59) 『復刻版 無我の愛』第一巻〜一四巻（不二出版、一九八五年）